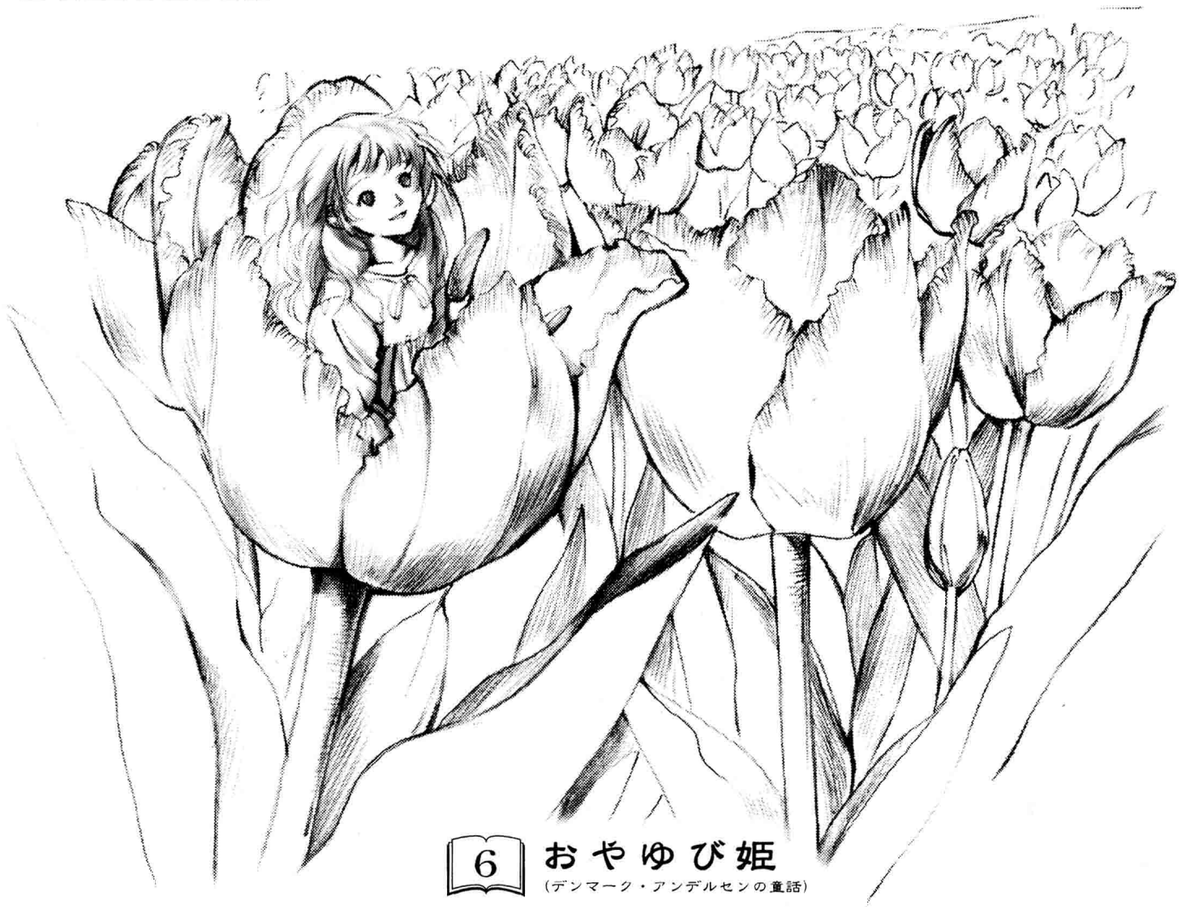
エレクトロニクスで社会に貢献する

ROHM

花から生まれた美しいお姫さまです。



6 おやゆび姫

（デンマーク・アンデルセンの童話）

「かわいい子どもがほしい」…女の人が、ちいさなチューリップのつぼみにキスすると、
花びらがぱっと開いて、ちいさなちいさなおやゆび姫が生まれました。
かわいいおやゆび姫は、動物や虫たちにさらわれ、長く苦しい旅を続けた末、野ネズミのおばあさんに助けられました。
しかし、たのしく暮らしていたのもつかの間、こんどは、陰気なモグラの学者と結婚させられることになりました。
おやゆび姫に助けられたことのあるツバメはそれを聞きつけ、いっしょにあたたかい国へ飛んでいこうといいました。
やさしい野ネズミのおばあさんとの別れがつらかったのですが、おやゆび姫はツバメに乗って飛び立ちました。
あたたかい国では、いちめんの白い花畑に、おやゆび姫と同じくらいのちいさな妖精たちが住んでいました。
おやゆび姫は、妖精の王子からすてきな翼をもらい、花の妖精たちといっしょに、いつまでもたのしく暮らしました…

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

「おやゆび」にもあれこれ。

「おやゆび」の名がつく小さな主人公が活躍するお話は、グリムや日本の昔ばなしにもあります。グリムの「おやゆび小僧の旅修行」は、体の小ささを活かし、せまいすき間に入り込んで金貨を盗んだりしながら旅をするお話。日本の昔ばなし「おやゆび太郎」は、馬の耳に入り込んで馬引きをしたり、川のコイに飲みこまれたりする冒険話。「一寸法師」や「うりこ姫」などが、お話の結末に大きくなるのにたいし、「おやゆび」の名がつく主人公は、いずれも体が大きくならないのが特徴。この点は昔ばなしの「おやゆび…」とアンデルセンの「おやゆび姫」に共通するところですが、大きく違うのは、女の子が主人公の「おやゆび」はアンデルセンだけであること。メルヘンチックなアンデルセン童話ならではのアレンジといえます。

姫が旅したあたたかい国。

チューリップから生まれた「おやゆび姫」は、ツバメに乗ってあたたかい国へと旅をします。アンデルセン童話が書かれたのはデンマーク。デンマークから南へ下ると、そこはチューリップの王国オランダです。オランダでは、16世紀からチューリップの栽培が盛んになりました。もともと栽培用のチューリップはトルコが原産。チューリップの語源もトルコ語のtulipant（ターバン）からきています。かつては嫁入り道具のひとつにもなったほど、その球根は重宝がられ、オランダを中心にヨーロッパで「チューリップ狂時代」がおとずれました。文学作品にもデュマの『黒いチューリップ』や、画家モネの『オランダのチューリップ畑』などが残され、文化にも強い影響力があったようです。このような歴史や地理的背景からみると、「おやゆび姫」は、チューリップの王国オランダをめざしたチューリップの妖精の話とも読みとれます。

花粉も旅をします。

おやゆび姫が旅したように、花粉もまた旅をします。旅をするといっても、花の蜜を吸いに来る虫や、風、水などを利用して、花粉を遠くの花へと運んでもらうのです。ミツバチは、花から花へと移動し、花粉を運びます。驚くことに、ミツバチは仲間のハチに、花（蜜）のありかを尻ふりダンスで教えています。太陽の位置をもとにして、巣からの距離、方角を知り、仲間に伝えるのです。また、植物は大量の花粉を生産し、空気中に放出された花粉は、上昇気流に乗ると何千キロもの旅をし、簡単に海を越えて飛んでいくことが明らかにされています。ところで、物語の結末、おやゆび姫は花の王子からマーヤと名づけられます。マーヤときいて思い出すのが「みつばちマーヤの冒険」。花から花へと旅するおやゆび姫マーヤと、花粉を運ぶミツバチのマーヤ、偶然かもしれませんが、どこか似ていると思いませんか？

昔ばなし監修／白百合女子大学教授　小澤俊夫
取材協力／筑波実験植物園園長　小西達夫

ローム株式会社
www.rohm.co.jp
本社／〒615-8585 京都市右京区西院溝崎町21
TEL(075)311-2121 FAX(075)315-0172
http://www.rohm.co.jp/

ゆめがあふれるあしたのために、LSIのロームです。

← 第5話へ

第7話へ →